

二〇一三年六月十五日

顧問 渡辺忠成先生 稽古会 講義録

【燕飛】

〈概論〉

◇新陰流をやっている人は、燕飛については誇りを持っている。日本の剣術史上で型というものは、もともと古くからあるが、燕飛の場合は六本の型が一つの太刀群という考えのもとに形成された最初の型。それを我々は伝統として稽古しているということなので、誇りをもってやってほしい。

◇燕飛を木剣で稽古するようにしたのは、柳生連也。武道具屋に行くと柳生流や柳生新陰流の木剣が置いてあり、我々は差別する為に木剣に新陰流と彫っているが、新陰流にしても柳生流にしても制定された木剣というものはない。石舟斎やその他の人々は、自分なりに好みで素振り用に木剣を作ったかどうかかわからないが、今使っているのは連也好みの木剣というだけ。連也が色々試行錯誤の末、この形が一番いいということで、最終的に連也好みの木剣として完成しただけのもの。他に柳生鐔と言われるものがあるが、そんなものはない。連也好みの鐔というだけ。柳生と言え、江戸柳生だつてあるが、江戸柳生は全然そんなことを知らないし、木剣もない。◇連也という人は、奥さんを貰わないとか色々気違い話があつて、好きではないが、燕飛に関しては今まで連続使いではなかったものを連続使いにしたこと、序破急の呼吸を鍛錬するのに有効であつたこと、及び木剣を使わせたということで、刃筋を習わせるのにすごく有効であつたということは、評価して良いと思う。

◇愛州移香斎の時代は、二十七箇条のような感じで、六本が別々だった。それが、上泉流祖の時代に三ブロック(本伝の燕飛の型)になった。破く急は、一本も止められないので、

一ブロックである。それで、流祖は三学¹を作るときに、どうしても三ブロックでは、日本の四季に合わないということで、四季に合うように四ブロックにして完成した(最後の二本は続けて使う)。三学の基になったのが燕飛。

◇流祖が石舟斎に与えた一番古い影目録では、燕飛の浮舟の後に獅子奮迅と山霞がある。ところが、四巻の後に天狗抄はない。ということは、天狗抄とは別枠で、獅子奮迅と山霞は大事だということで教えたのかもしれない。ところが、これがいつの間にか幕末の江戸柳生になると、獅子奮迅と山霞の代わりに折甲、刀捧の二本が加わっている。その折甲、刀捧は警視流に入った。警察の剣道の関係者は皆、「柳生流は二本の型が入っているんだ」と言うけれども、ではやってみせてくれと言っても、全国のどの剣道の指導者に聞いても、「入ったということは知っているけど、実技はわからない」と言う。我々はわかる。

◇折甲、刀捧は燕飛では破られる打太刀の方はあるが、実はものすごくいい技である。桃嶺先生はもったいないと思つて、折甲、刀捧で勝つ技を試合勢法の中に入れていた。

◇獅子奮迅は、天狗抄の二刀(破り)の事。昔は獅子のように折り敷いて転打をするので獅子奮迅と呼んだ。

◇山霞は、天狗抄と同じで、山の靈気という意味。最初の型は、小太刀を左手、太刀を右手に持ち、武蔵の自画像のように持ち、左手の小太刀を相手の顔にパツと投げて、相手がびっくりしている所を、左手でつかみかかつて、右の太刀で突くという技だった。その後、小太刀がなかったら、最初から左手を出して、打ってきたらつかまえて突くぞという気を出しておいて、相手がつかみかかつてくる左手が気持ち悪いと打ってきた所を、左手を引いて、右片手で轉身しながら順にバサツと切つてしまう技となった。桃嶺先生は、左手の小太刀を差し出しておいて、右片手で轉身しな

がら転打をするように変化させている。山霞は、その原型となっている。石舟斎が、天狗抄を元の型から今の本伝の型にした為に、その原型がわからなくなっている。しかし、どちらが良いかというと、右手で小太刀を顔に投げるのもなかなか難しく、どこかに飛んでいってしまうが、それを左手で投げるのも相当難しい。やる必要がないので、自分で練習してやってみたこともないが。昔は左手で小太刀をパツと投げることもあったのだらう。

◇本来、燕飛は陰流の時は猿飛と書いた。猿はもう人間業ではなく、マシラの如くという言葉があるように、ひよいひよいと木でも何でも渡っていく、その様子によく似ているということ、愛州移香斎は総称として猿飛と名付けた。一本目も猿の動きをイメージした猿飛という名称だった。それを天橋立の古の方の覗きの所、駅の方から行ったら天橋立を渡って対岸の中腹あたりに古い展望台がある。ロープウェイがある方は、戦後の昭和四十年、五十年くらいにつくられた展望台がある。そこで、流祖が燕がものすごく宙返りしているのを見て、これは猿ではなくて燕なんだということ、総称と一步目を燕飛に切り替えた。一本目のセイレイ返しだって、フワツと落とすように言っているが、あれも燕が宙返りして飛ぶのによく似ているので、燕飛ということの良い。柳生会が力いっぱい打ち落としているのは、セイレイ返しでもなんでもない。燕は宙返りする途中で力まない。足は地についているが、燕が自由自在に空を飛んでいるような気持ちになって、一本目をやると良い。

◇燕飛には、本来取り上げ使いはない。内伝は連也がつくった。兵庫助は、つくっていない。柳生会では現在取り上げ使いを稽古している。あれは延春さんが小学校、中学校の時にいくら教えてもできないので、厳長先生が取り上げの型を考えて教えたもの。それが標

準になってしまった。小学生くらいの子供の時は少しは取り上げ使いをやるが、戦前の会員は、子供の時からやっていないので、下から使いしか知らない。一本目の燕飛で、最初に打太刀が小手を打ってきたら、くねりでよけるのではなく、撥草に取り上げて、青岸の構えで攻めていくという形は、あれは取り上げの型。我々からしたら、取り上げ使いは真似してはいはいけない、悪いものは見てもいけないうまい昔は言ったが、そういう悪いものをつくってしまったのは、親バカの厳長先生の最大の失敗例である。親は、子供のために親バカになるので、仕方ない。それに対して目をつぶっているだけで、転会では取り上げ使いを真似するということは一切ない。

〈燕飛〉

◇使太刀は、真っ直ぐの中段。打太刀が何もしてこなければ、進んで行って喉元に突きこむ。使太刀が無形から中段になった瞬間に、打太刀が青岸に構える。使太刀が中段で進んで突いてきたら、打太刀は青岸から簡単に擦りあげられる。正面のつけ打ちで、小手を打つこともできる。だから、使太刀はやばいと思っ待つ。

◇打太刀は、青岸から折甲に入ろうとするが、使太刀が押さえるので、やめる。使太刀が押さえてこなければ、太刀を擦り上げて、折甲で脇の下に入る。

◇打太刀は負け役ではあるが、攻める時は必ず隅かけて勝つようにする。その隅とは、わずかに剣先を越して手首や肘を切ることであるが、この技の場合は、一番角度が大きい45度の線で攻める。打太刀が、どうしようかなと下から折甲で撥ねようすると、使太刀から刀で押さえられるので、これはだめだと思っあきらめる。それで今度は、使太刀の刀が下がったことで、使太刀の小手の辺りが空いて見えるので、打太刀は刀を回しながら、隅かけて使太刀の左小手をバサツと切る。

◇使太刀は、右足を少し引きながら、くねりの形になるが、右足を引いたことで、両足のかかとどうしの位置関係が弱い位置にずれてしまうので、押されてもあまり強くない。そこで、右足のかかとの前方の延長線上に左足のかかとをスーッと出すと、強い形になる。突く時にまず下半身を強化しておいて、それから突くぞとジワッと攻める。

◇打太刀は引いて、撥草に構えるので、使太刀は城郭勢になりながら、すぐ切先を打太刀の右肘の上に持つてくる。切先が低いと、打太刀から石火のくねりで刀を打ち落とされる。切先が高いと、打太刀は伸び上がらないとくねりを打てない。打太刀の右肘から小手にかけて切り上げる筋で構えると、打太刀が打ってきたら、ちょうど小手を切ることができる。だから、打太刀は打てない。使太刀は、ただ刀を肘につけているだけではなく、歩きながら切先をジワジワと打太刀の左目まで持ち上げる。これは、二の切りの一番古い形である。

◇打太刀は、使太刀の左小手を片手で打つ。打太刀の刀が下りてきた時に、使太刀は右足を真後ろに引きながら、ヒラリと燕が宙返りするように刀を下して、打太刀の刀を裏返す力はいらない。打太刀は、当てたはずなのに負けている。柳生会は、力いっぱい引つ叩いているのを、力いっぱい打ち落としているが、あれは燕でも猿でもない。猿にも笑われてしまう。

◇使太刀は、セイレイ返しの後、打太刀の片手打ちで足を切られない様、足を守る。足を守る手を後ろに引きすぎないように注意。足を守っていると、首の周りが空いてしまうので、打太刀の魔の太刀で首を切られないように後ろに下がる。

◇使太刀が止まったら、打太刀は低い姿勢のまま左足を前に出して、刀捧の構えとなる。使太刀がじっとしていたら、刀で使太刀の両肘を上から制してしまいうつもりで、前に進む。◇打太刀が刀捧で攻めてきたら、使太刀は低

い姿勢から高い姿勢に変わりつつ、左足³を半歩踏み込み、雷刀に振り上げながら、前に進みつつ刀捧を真直ぐ打って、叩き落そうとする。使太刀は一度止まってから動き出すので、左足を半歩出さなければ加速できない。打太刀の刀捧が最初から頭の高さまで上がっていると、使太刀は叩き落さない。腹の高さの時に、使太刀が叩き落そうと打ってくるので、頭の高さまで刀捧を上げて、相架ける。

◇打太刀が、使太刀の刀を左手でつかむので、使太刀は相手の方に真つすぐ押し込むと同時に、左足を集める。そうすると打太刀がのけぞるので、使太刀は打太刀の指を切り上げながら、後ろに下がる。

◇打太刀は左指を切られたので、その後は右片手で打つべきであるが、木剣で片手打ちを打ち落とされるのは危ないので、両手で打つようにしている。打太刀は、使太刀の首かけて、順勢に相手の前を切り抜けるように打つ。切り抜けないで、使太刀の正面に立ってしまったら、使太刀は左足を引いて和トや転打で勝つことができる。だから、切り抜ける。

◇使太刀は、打太刀が切り抜けようとするので、左足を前に出し、刀を回して相手の刀を打つ。打ち終わった後、使太刀は打太刀の右斜め前に立つ。右前足は相手から見て内股にならない様注意。打太刀と使太刀の右前足が、場の左右でいたい一直線上になる。物打ちは、打太刀の首を狙っていて、二の切りと同じ形となる。使太刀がそのまま歩いたら、打太刀の首を制することができる。

◇打太刀は、本当は切り抜けているので、打ち終わった後へそは使太刀の方を向いておらず、使太刀から打たれたら、そのまま後ろへ突き飛ばされる形となる。但し、使太刀が手加減できないかもしれないので、打太刀は急いでへそを使太刀の方に向けて、押されても大丈夫という形にしている。その後、お互いに後ろ足からスーッと下がって、青岸になる。

〈猿廻〉

◇元々さるまわしと呼ばれたが、そういう呼び方では猿に怒られる。猿は、猫みたいにヒラリと体の向きを変えて転換する。昔は野生の猿も多く、観察して名付けたと思われる。実際に高尾山の猿山で観察していたら、猿が木の上をポンポン動いて、先に枝がなくなったら、向きを変える時に、顔と共に腰がまず動く。そして、隣の枝にピョンと飛び乗る。人間は向きを変える時、顔は動くが、腰はなかなか動かない。その猿の動きに似ているということ、技の名前としている。

◇猿廻が燕飛の中で一番大事だというのは、流祖がこの技から転を閃いたためである。本来の転とは猿廻のことである。

◇燕飛の中の転を全部猿廻にすると説明が混乱するので、尾張柳生が最後の浮舟の真つ直ぐの打ちを転ということにしてみました。

◇日本の信号機は三つあるが、あれと同じように、三本とも全て転である。最初に左の敵への順打、次に右の敵への逆打、最後に真中の敵への真つ直ぐの打ちというように、全ての敵を倒すことができる。それが転である。

◇流祖が閃いた転とは、左の敵を打った後でも、右から来た敵に「あらそう」と、自由自在に動きながら、コチンと押さえる。打つのではなく、押さえるから、次に突ける。ガチンと打ってしまうと、逃げられてしまう。柔らかくコチンと押さえて、スーッと突く。最後の浮舟もコチンと押さえて突く。突く部分を隠す為に、刀を投げて打つということをやっている。

◇陰流の燕飛は、必ず最後の浮舟は打太刀が刀を投げた。もう指が使えないから、命が惜しいので、刀を相手の顔めがけて投げて、一目散に逃げた。しかし、それでは転にはならない。投げて来る刀を、縦筋で打ち下す必要がないし、その後、突く必要もない。打太刀が最後の気力を振り絞って、片手で順に打ってくるので、コチンと打って突くという転の

形になる。だから、転会では投げてきた⁴刀に対応する練習はするが、型としては投げる形にしない。もし、投げる練習をするなら、竹刀であれば当たっても大したことないので、竹刀で練習すること。木剣は、当り所が悪いと回転してきたりして体に当たると危ないので、投げる練習には使わないこと。

◇車に構える時の刀の軌跡は、青岸からそのまま真つ直ぐ車に変われば良い。九箇の十太刀の場合は、真つ直ぐの中段から、刀を寝かすように車になる為、刀の軌跡は放物線を描く。打太刀は、左小手を狙われる為、打たれない様車の構えになり、使太刀の左肩を見る。

◇打太刀は、本伝では使太刀の左肩ではなく背中を轉身して打つのであるが、そうすると使太刀から小手を打たれてしまい、内伝の木剣の稽古では危ないので、轉身しないで左肩を打つ。そうすると、使太刀の刀が打太刀の刀に当たる。使太刀は、下までしつかり打ち下した後、青岸の高さに構え直して、首を打つ氣勢を見せる。(本伝の場合は、下まで打ち下して小手を押さえたままとする。)

◇打太刀は、後ろ足から二歩後ろに下がると、使太刀の太刀の先に使太刀の肩、首が見える。そこで、打太刀が右肩を狙って逆勢の猿廻を打つので、使太刀は元の構えのまま太刀を右肩に上げて、逆勢の猿廻を打ち、下まで押さえる。その後、また首を打つ氣勢を見せる。

〈山陰〉

◇打太刀は引いて、撥草に構える。使太刀は、刀を回してもじる(終る)。広義のもじりにはくねりも含まれる。全部もじりと呼んではしまうので、刀を上側からパタンと倒すのをくねりと呼び、下側から切り上げるのはもじりと呼ぶ。もじりには、左右のもじりがある。

◇読み方は、さんいんではなく、やまかげ。やまかげなので、伸びあがって良い。打太刀が足を打ってくるので、使太刀は前左足を引いて右足にそろえながら、雷刀になり、右足

を出しながら、一打三足で打太刀の両肘を制する。

◇使太刀が左足から後ろに下がる時、打太刀の右小手を制しながら、魔の太刀が出ないようにする。

◇左足から大きく引いて向上の青岸に構える。手は上げすぎず、両脇はしめる。横雷刀ではない。取り上げの八重垣は柄が頭の上にあるので、横雷刀で良い。頭の上にあるからくねりができないので、逆勢に持つて行っている。

〈月影〉

◇日本人は月影という言葉が好きで、TVドラマの月影兵庫のようによく使われている。この技を月影と呼ぶ理由は、月が雲に隠れていて、雲がなくなると月の光がサッとさす感じの技であるため。打太刀が魔の太刀を打って、折甲で入ってくるその瞬間に月の光がスッとさすように刀を出す。強烈な太陽の光ではなく、柔らかい月の光だから力はいらない。刃筋は立てる。稽古では刀を打っているが、実際は打太刀の右小手を刃筋を入れて切る。鎬で引く叩くという教えは何かの本で書いてあるかもしれないが間違いで、鎬で打つということはまずない。カウンターパンチを刃筋でいれるから、ポンポンと軽く打てば良い。二本目の打ちは、左足を出しながら逆勢に返して打ち、その後、深檐勢で下がる。

◇打太刀が撥草に取り上げた瞬間に、使太刀は低い姿勢から高い姿勢に変わりつつ、青岸の筋で構える。この構えは、二の切りの変形。打太刀が先に撥草に構えているので、使太刀は通常の二の切りのように足を上げたり踏みだりしていると、先に打たれてしまう。だから、付ける拍子で前足をその場で踏みつつドゥンと構える。ただ木剣を使っているので、打太刀の小手に当てるのではなく、肘に付けるだけ。

◇打太刀は使太刀の正面から打ったら、使太刀に撥草に上げられて引く叩かれて負けてしまうので、使太刀の前を切り抜けながら打つ。

使太刀は青岸の30度の平の筋で、打太刀は撥草の45度の筋なので、使太刀がそのままじっとしていたら、打太刀が切り抜けながら使太刀の刀を寝かすように打ってくるので、負けてしまう。だから、撥草に上げて、場の左側前隅に体へそ、右足の爪先を向けるようにして、打太刀の首を打つ。

〈浦波〉

◇浦波とは、波が岸壁にぶつかって、乗り越えないで、ドゥンと引いていくイメージ。使太刀は、左足で小引きして、右足を引きながら撥草に構える。打太刀が魔の太刀を打って折甲で入ってくるのを、まるで波が岸壁にぶつかるように、下からガチャーンと切り上げる。そして、その波がパーッとね返るように右後ろに切り上げる。その時、打太刀は、片手で使太刀の腹を水平に切る。

〈浮舟〉

◇打太刀が刀捧に構えるので、体を正面にむけながら、打太刀の左手を打つつもりで、刀の左手のそばを打ち、すぐに左肩に逆勢に刀を返して、今度は右手を打つつもりで、刀の右手のそばを打つ。その後、刀を回してもじる。打太刀は、刀を下しながら二歩下がる。

◇昔は浮舟は、香取神道流の大竹師範の演武のように、空間で左右の足をかえて着地するという方法でやっていた。今はそれをやらないうで、打太刀が片手打ちで足を打ってきたら、使太刀は刀をグルリと回して転打をする。刀が下りてきたら、左足を引いて折り敷きする。打太刀が負けましたとお尻を後ろ足につけるまでは、使太刀は、いつでも突けるという氣勢を見せる。打太刀がお尻を後ろ足につけて下がり始めたなら、使太刀は立ち上がる。

◇浮舟の名称の由来は色々説がある。もじつた位置から雷刀になりながら、飛び違い様に空間で足を踏みかえ、転打をしながら着地するというのが一番の原型。甲冑剣法でできるようなしたので、足は飛び跳ねないでやるようになった。もう一つの説は、打太刀の刀が

波間に浮いている舟のようだというものだが、この説はこじつけと思われるので、好きではない。

◇打太刀の最後の片手打ちを伸び上がってやってしまう人がいるが、足を打つつもりでやるので、伸び上がらないで打つ。

◇その他◇

◇バカ力で打つ必要は何もない。バカ力でやると、木刀と木刀だから、強く打ち合わせるとお互いの手が痛くなる。ところが、全然力を入れずに柄にピッタリと指がくっついた状態でお互い打ち合わせると、手は痛くない。その握り方が日本刀の握り方と同じなので、自然に手の内や刃筋を覚えさせることができる。そういう点で連也の功績を評価しても良いと思う。竹刀では、丸いので手の内や刃筋がわかりにくい。又、木刀が当たったら痛いので真剣に稽古するという、副次的なメリットもある。

◇発声は、陰流の頃は一番多くて五回出していた。五回の場合は、連続技ではなく、六本別々の技のときに出していた。江戸時代の頃になってから三回、又は一回になった。一回だけ出す場合は、浮舟の最後の時に出していた。それは、急の太刀になったときに、息を吸い込んだまま呼吸しないで、最後の力で呼吸をハッと吐くだけの発声をして、打ち下す。柳生家では、戦国〜江戸時代は、三回の発声を標準として練習させていた。

◇発声は呼吸法の練習。桃嶺先生も伝書に書いているように、声を出すのは気をたすけるということになっていて、上級者は、そんなことをしてはいけない。声に頼って気を高めているのは、まだ雑駁である。転会では、全然発声しなくてもできるように練習している。最後の浮舟は、呼吸を止めて急の太刀をやった後では、つい吐気が出てしまうが、それはよろしいとしている。

◇柳生会では絶叫のように発声しているが、

あんな発声をする必要性は一切ない。例えば、セイレイ返しの後、使太刀が下がる時に声を出せというのは、それまで呼吸を止めて攻めていたのを吐きだすという意味で、音声ではなくて、ハーツという呼吸を吐く音のことである。それを音で聞こえないとどれだけ長く呼吸を吐いているかわからないので、わざわざ音を出して下がった。できるだけ、全部吐き出せ、それくらい大きく下がれという呼吸法の練習であった。

◇発声自体は、絶対出してはいけないとは言わないが、なぜ一回の発声で十分だと言うのか。その根拠は、新陰流で一番大事な三つの無、無形 無声 無色である。まず無形で、次に無声、無色がくる。この三つが最大に大事な事項である。だから、声なんか出さない方が良い。声を出すということは、相手にそれだけ悟られてしまうことになる。息を吐き終わって、吸う時に虚無になるので、それを教えてはいけないということ。無色も同じ。色がつかないから、相手は観察できない。少しでも色をつけると相手はわかってしまう。全部孫子の兵法の中にある用語。一つの哲学であるが、宗教くさくない哲学。宗教に関係ないので、誰でも言える。

◇孫子は好きではない。一番悪いのは、中国政府に孫子のずるさだけが伝わっている。いい所は共産党の政治家は何もやらないで、悪い所ほど惹かれて習っている。

◇三国志の関羽が傷ついてそれを治した伝説の名医華佗から、活人剣という言葉が出た。人を殺す刃物で人を活かしたということで、その言葉を使うのは外科医だけは認められる。我々の場合は、宮本武蔵のように直接相手を威圧してバサッと切ってしまう殺人刀か、またはある所を動かして打ってきたら勝つ活人刀があるが、それがいつの間にか宗矩が政治に活かしたということで、活人剣になってしまった。我々の場合は、人を活かす剣ではなく、人を動かして勝つ、活人刀である。

◇世の中で活人剣という言葉だけが使われて、空手でも使われているが、空手で人をやっつけることをやっているのに、精神的に人を活かすと活人拳として使ったりしている。華佗ですら、外科医としては中国で一番であったが、本当は自分は軍隊の將軍として活躍したいと思っていた。ところが、曹操はそれを見抜けなくて医者としてのみ活用した。それで頭にきて、曹操が病氣になった時に仮病を使って絶対に診察しなかった。何万もの大軍を与えて貰って將軍として認めて欲しいと考えていた。

◇折甲を破る方法は、二十七箇条でも出てくる。逆に折甲で攻める方法としては、燕飛の最初の打太刀が折甲になっている。また、同じ折甲でも、手の高さは狙う高さによって変える。背が高い相手の雷刀の小手を押さえる場合は、低い折甲では届かないので、高い折甲となる。ちなみに相架け返し打ちは、雷刀の相手に折甲で入ろうとしたら、相手が打ってくるので、相架けて返し打ちをしているもの。敵の折甲が間合いが遠かったら、雷刀から打ち下してやつつけてしまえとなるのを、相架けて防いでいる。相架け返し打ちは、折甲が基になっている。

◇折甲、刀捧は、原則として魔の太刀が付随している。昔の魔の太刀は、螺旋の輪を切った。相手が青岸に構えている所へ、刀を回しながら近づき、最後に小手を打つと、相手はびっくりして撥草に逃げる。そこに折甲で脇の下に入り込む。刀捧も同じで、相手がびっくりして撥草に逃げた瞬間に脇の下に入る。

◇一本目の燕飛で、刀捧に対して雷刀で打っていく時に、相手の太刀を左手で取り押さえ、右手一本で首を攻めるというのも、刀捧の技。相手の太刀を地面まで落としてしまうこともできる。左手は刀を握らないように持つ。そのまま相手の太刀を踏み折ることもできる。普通なら打太刀が勝っている。負け役だから、負けてあげているだけ。新陰流は、不思議で、

まず勝つ方だけ練習させる。だが、先生は心の中では負けたことは一度もない。返し技を使えば、みんなやつつけられる。

◇刀捧は、ものすごく強い。刀捧で構えている所に相手が雷刀で打ってきたら、左手で相手の刀をつかみつつ。右足を前に出しつつ、右手の柄を前に出し、腹を攻めることもできる。相手が雷刀から物打ちで打ってきたら、左手は物打ちをつかむので、右手の柄が相手に届かない。だから、対刀捧の時は、物打ちで打たねばならない。刀の中央で打つと、懐に入られてしまう。

◇逆に刀捧は懐に飛び込んでしまえば良い。相手の太刀の根元で受けると、より深く相手の懐に入ることができるので、右手の柄で相手の首を打つことができる。また、相手の太刀の中央付近で受けた場合は、右手の柄が首には届かないので、柄で相手の左小手の内側を引っかけ、回転しながら右方向に崩しつつ、同時に左手の刀で首を切りながら、更に崩すこともできる。それを象徴的にやっているのが、杖である。太刀では、柄で殴ってはいけないので。

◇折甲には、順勢はない。相架け返しには順勢があるが。何故かというと、順勢はあまり強くない。逆勢は、左右の小手がからんでい

るから強い。

◇左ききの人であれば、逆方向の刀捧はある。通常は、右ききの人向けの練習をしているので、片方の型しかない。

◇捷徑は、刀捧のように見えるが、本々は両手で柄を握っていた。その後、相手の刀を受ける時は、刀を中取りした方が強いという碎きが出てきて、更にそれなら最初から中取りしている方が楽だとなっただけのもの。

◇燕飛は、徹底的にやると準備体操の代わりになる。また、どちら側の方角に下がるか等、方向性の稽古になっている。それから、足捌きの稽古になっている。

◇猿廻の足の捌きは小さい。それが大きくな

つてくると、切り抜けるときの大きな捌きになってくる。

◇猿廻の捌きをいち早く取り入れた能楽家が、金春である。金春流の足捌きなんてない。金春が石舟斎に剣術を習って演武を見て、これはいいと能に取り入れた。これはコソコソ盗んだのではない。習ったものを取り入れただけ。その代わりに、石舟斎に習ったお礼ということで、新陰流になかった西江水という用語を金春から教わった。用語があるとわかりやすいので大事。いちいち腹引いてとか説明するより、西江水きかせてと言った方がわかりやすい。

◇猿廻の身勢で体術をやると簡単である。手だけで技をかけようとするとダメであるが、手と体の向きを合わすように動くと、簡単に技がかかる。

◇内伝では刀を打っているので、本伝を習わないと、実戦でどこを打つのかわからない。お互い外して打って打ったつもりで練習していたのを、本伝では実際に小手を打たせて練習させる。桃嶺先生もさすがに本伝は封印して、内伝の形で小手を打たせて練習させた。◇場所があれば徹底的に何十回も、自分の体操を兼ねて滑らかに練習すると良い。三学等は打太刀がいなくて一人使いではわかりにくい、燕飛は打太刀がいるとぶつけなくてはならないので、一人使いでやる方が柔らかさが出る。一人で練習していくと、柔らかい剣になっていく。

顧問

（監修）

渡辺 忠成

師範

（作成）

上田 祐嗣

加藤 雅也

杉田 清麿